

奨励

同志社の羅針盤

奨励	鈴木 直人 [すずき・なおと]
奨励者紹介	同志社大学心理学部教授
研究テーマ	感情心理学、環境心理学、精神生理学

イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」

(ヨハネによる福音書 8章31—32節)

京田辺校地宗教施設建設の喜び

皆さん、こんにちは。心理学部の鈴木です。

ゴールデンウィークの最後の日、またこの穏やかな日差しの中、チャペル・アワーにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また、こうしてチャペル・アワーのひとつをもてますことに感謝いたします。お配りしました文章は、同志社チャペルの定礎式で、新島が「チャペルは同志社の精神なり」と題して述べた式辞の一部です。

京田辺校地開校以来、四半世紀以上経ってしまいましたが、漸くキリスト教主義の大学である同志社が、本来のあるべき姿を作り出すことができました。京田辺校地にチャペルの必要性を主張してきた者として感無量です。

10年ほど前、キリスト教文化センター所長を任されていた時、京田辺校地にはチャペルがないんだという現実を具現化しようと、ラーネット記念図書館の前の芝生に、青空チャペルと称するスペースを作ったことを思い出します。キリスト教主義を標榜する同志社の京田辺校地にチャペルがないのはおかしいのではないか、と当時の八田学長へ訴え、京田辺校地における宗教施設建設検討委員会なるものを立ち上げさせていただきました。当時、京田辺校地にチャペルを建てることに、反対もありました。

そもそも、京田辺校地ができた時、チャペル建設予定地は、現在の夢告館のところにありました。まず一番最初にチャペルの位置が決まり、それからいろいろな建物の地割が決まっていたと聞いています。キリスト教主義を標榜する同志社としては、当然のことだと思います。にもかかわらず、京田辺校地にチャペルはできませんでした。その理由は、ある程度は知ってはいますが、正確に知りません。関心のある方は同志社の歴史を纏めてみてください。面白い発見があるかもしれません。宗教施設建設検討委員会を開いた当時から、非常に強い反対意見がありました。一番の反対理由は、京田辺にはすでに校友会の募金で建てた京田辺校地の宗教施設、すなわち新島記念講堂があり、募金をしてくださった校友に申し訳が立たない。だから建設そのものに反対だ、計画が出たら絶対につがしてやる、と言っている方がいたことを人づてで聞いたことがありました。しかし、この反対は、反対のための反対でした。なぜなら、実は、反対理由とされた校友会から「京田辺校地に建学の精神を实践するような建物を建てるための寄付をする用意がある」との申し入れを受けていたのです。創立以来130年近く経過し、創立当時とは全く環境が異なる現代においてさえ、新島の式辞の時と同様、キリスト教を軽視し、嫌う人が、同志社の主要なメンバーを自認する人の中にさえいたことがわかります。答申から10年、紆余曲折はありましたが、何れともあれ、京田辺校地にチャペルができました。このチャペルでの祈りが、未来永劫、全世界に届くことを願っています。

言館、光館に対する印象

言館、光館の工事の様子は、私の研究室が、すぐ隣の香柏館にあるため、ほとんど毎日のように見ていました。にもかかわらず、言館と光館の工事用の囲いが外された時、びっくりしてしまいました。まず感じたのは、建物の異様さ、そして何よりも驚かされたのは、外壁の青い壁でした。「何なんだ、この壁の色、この水、このガラス張り」。このチャペルは、同志社のチャペルとしてそぐわないのではないだろうか。すなわち私の描いていたチャペルとは、似ても似つかぬものだったのです。私のこの感想は、多くの人が共有するものだったと思います。しかしながら、3月末に挙行された献堂式の後の施設見学で、建築設計士ご本人から、このチャペル建設にかけた思い、情熱、それぞれの仕掛けの意味などを聴いているうちに、これもありかなと、少しずつポジティブに評価するように変化している自分を自覚していました。ただ今更のことを言わせていただきますと、学長への答申で、この場所をチャペル建設用地として提示してしまったことを少々後悔しています。あの答申を出した当時、私の研究室は今出川にあり、京田辺のことはあまり分かっていなかったのだと思います。京田辺校地の中心は、今後、多目的ホールの一帯になるものと思います。チャペルはやはり、多目的ホールの跡地に、多目的ホールの機能を集約して建てるべきだったのではないだろうか、今は思っています。

同志社の羅針盤

さて、今日の奨励のタイトルは「同志社の羅針盤」です。羅針盤、すなわち方向を指し示すものです。「同志社大学設立の旨意」を読みますと、そこには「ただ単に普通の英学を教えるだけでなく、徳性を磨き、品性を高尚にし、精神を正しく強めるように努め、ただ技術や才能のある人物を育成するだけでなく、いわゆる「良心を手腕に運用する人物」[良心の全身に充満した丈夫(ますらお)]を産み出すことに努めてきた」(現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000年)とあります。つまり、同志社は、キリスト教に基づく徳育の精神を教育することを目的として設立された学園であり、ここに同志社教育の真髄と特徴があることを語っています。同志社の教育の目標は、キリスト教主義に則った教育を受けた人物を涵養すること、人を植ゆること、人を育てること、すなわち人間教育が大前提にあるのです。

これは、何時も私が言っていることなので、どこかで、私の話を聞かれた方は、また言っているとされるかもしれませんが、現在の同志社のキリスト教主義は、空念仏、羊頭狗肉に過ぎないように思います。要するに「看板に偽りあり」なのではないでしょうか。本学の「入学案内」や「大学案内」には必ず「良心」とか「キリスト教育の豊かな実り」とか、「自由主義」、「国際主義」というような言葉や単語がそこかしこに散りばめられています。入学式、卒業式でも、総長が、学長が、キリスト教文化センターの所長が、これらの言葉を何度も、何度も連呼します。つまり、同志社は創立者の理念や建学の精神を大きく正面に掲げている学園であり、いかにも同志社はこうした理念に則った教育を行っていますと言っているように聞こえてきます。ところが、今出川では、なんとなく同志社の精神的風土や歴史に触れることができますが、これまで京田辺校地にはそうしたものは微塵もありませんでした。なんとなくすら感じられません。入学式で同志社の精神がどうのこうのと嫌というほど連呼され、その後は何も無く、卒業式でまた連呼。というのが同志社で受けたキリスト教主義教育の実態です。私の学生時代は、講義の中や酒の席で、同志社について熱く語る先生が毎年1人や2人はいました。しかし、そういう先生は今ほとんどいません。今や、同志社精神、新島精神、良心教育といった同志社の「こころ」は形骸化してしまっていると言わざるを得ないのではないのでしょうか。同志社大学と立命館大学、京都大学、その他の大学。どこが違うのでしょうか。同志社の同志社たる所以は、どこに見出すことができるのでしょうか。

大学で学ぶべきもの

最近、同志社科目というものが設置されました。同志社で学ぶ以上、せめて同志社精神の一部ぐらいは知ってもらいたいと思い、当時の田端教務部長にお願いして、教養科目の再編の検討の中に入れてもらったものでした。無駄なものを学ばれていると思っている学生も多いかと思います。教職員はいかがでしょうか。どのように思っているのでしょうか。宗教学や同志社科目を必修としている学部は、現在いくつあるかご存知でしょうか。たった2学部、理工学部と私のいる心理学部だけです。履修することが望ましいとしているのが、経済学部と商学部の2学部です。13学部の大半が他の科目と同じ扱いの選択科目の一つです。いい意味でも悪い意味でも、そのあたりは実に同志社的なものかもしれません。

同志社で学ぶ以上、創立者の考え方、生き様、あまたの先人たちの行いなどを知ることは、同志社人として、人間として成長していく上で、どういう大学で学んだのか、知っていて損はない、というよりも同志社が私立大学である以上、ある意味当然のことだと思っております。私は、大学で学ぶべきものは、専門の知識や技術に特化されたものだけではなく、その他のこと、特にその学園が何を指して建てられたものであるのか、そこで学ぶということ、自分にとってどういう意味があるのかを考えることは、専門を学ぶ以上に重要な事柄だと思います。専門の知識は、家で専門書を読めばわかります。また、専門教育は今や大学院レベルでの話だと思います。それよりも実際に学部の講義に出て話を聞いて面白いのは、先生方から、それにまつわるいろいろなエピソードや経験談を聞くことができることだと思います。それは決して無駄な時間ではなく、そこに生き方に関する、研究に関する多くのアイデアやヒント、研究の楽しさ、ノウハウなどが含まれていることが多いからです。これこそ高校教育と大学教育の違いです。大学教育の場合は、高校までのように知識をそのまま詰め込むのではなく、学生の方が、自分が興味をもった問題に対する自分の考え方、やり方を生み出していくのを助けるための知識や技術、アイデアを提供する場であるからです。

私立学校は志立学校

話を戻します。「私立学校」は「志立学校」である、つまり「志をもって立つ学校」であると元神学部の本井先生はおっしゃいました。至言であり、私立学校を端的に表す言葉だと思います。何より、私は非常に気に入っていますので、いろんなところで使わせていただいています。言葉どおり、同志社は同じ志をもって建てられた学園です。この志が、同志社の羅針盤だと思います。その志の根幹はキリスト教主義に基づく人間性の涵養にあることは、皆さん同意してくださるものと思います。よく半分洒落で、また半分本気で、同志社の三角形のマークがすべて下を向いており、それは下に眼を向け、同じ位置に立つこと、understanding、つまり理解することにつながるのだと言います。同志社の精神の実践は、案外この辺りにあるのではないかと私も思います。

新島の教育理念

さて、新島の教育理念はどのようなものであったのでしょうか。徳富蘇峰は、新島の葬儀にあたり、新島の教育理念を表す言葉として、「彼等は世より取らんとす我等は世に与えんと欲す」という幟をかざし、新島の棺を担いで、若王子の山の上まで行進しました。「受けるよりは与える方が幸いである」。新約聖書の使徒言行録にあるこの言葉を、徳富は言い換えたものかもしれませんが。すべてのいかなる立場の人に対しても、同情や哀れみでなく、人として共生すべく心を込めて「与える心」を覚えること、それこそ同志社の精神ではないでしょうか。徳富が書いた文章を「世の多くの学校は、世の中の人々より奪うこと、いかに儲けるか、いかに働かすかなどを教えている。同志社は、世の中の人々に与えること、どうしたら世の中の人々のためになるか、助けることができるかを教えようとしている」と私なりに解釈しておきます。新島は、どのような職業に就こうとも、世の中の人々を踏みつけ、自分のみが得をすることを考える人物ではなく、その人に寄り添って歩き、援助の手を差し伸べるような人物を涵養したかったのだと思います。新島の、「諸君よ一人一人は大切なり、一人は大切なり」という言葉も同じ精神から出た言葉だと思えます。

新島精神の具現化

ご存知かと思いますが、同志社は身体の不自由な方をケアする施設に関しては、日本でも有数の大学です。クラーク記念館をのぞき、どの建物へも車椅子で入れます。耳の不自由な方にはノートテーカーやPC通訳のサポートが確立しています。おそらく同じレベルの大学は日本福祉大学ぐらいではないでしょうか。同志社は「福祉の同志社」と呼ばれた伝統もっています。こうしたところに、新島の教育理念が反映されているのだと誇りに思います。特に最近、同志社は積極的に、障がいをもつ学生を受け入れ、さまざまな対応をしてくれています。それ自体は非常に素晴らしいことであると思います。しかし、問題は、教職員や学生の意識です。受け入れ体制は本当に整っているのでしょうか。ハード面は形だけできたが、ソフト面、つまり人間の方はどうなのでしょう。車椅子用のスロープの上に置かれている灰皿、障がいをもった人の駐車場に平気で停める人、男子トイレの中にある障がい者用のトイレ、障がいをもつ女性の方はどうなのでしょう。まだまだ当たり前のことが当たり前になっていません。谷川俊太郎さんが作詞した同志社小学校の校歌の歌詞に、新島が植えようとした人間性が描かれていると思えてなりません。

感じる 夢見る 問いかける 心は 不思議な 大きな部屋
森の緑 海の青へと どこまでも 透き通る 世界はとつても 美しい
感じる 伝える 思いやる 身体は やさしい 小さな宇宙
人の痛み 悲しみ見つめ 微笑んで 手をつなぐ
明日を願って 祈る今日
えらい人になるよりも よい人間になりたいな 同志社小の私たち

建学の精神を取り入れた大学改革

現在、大学は苦難の時代になりました。文部科学省は、大学を膝下に置くべく、COEプログラムを振り出しにさまざまな施策を行い、大学に改革を促しています。厄介なのは、この施策への申請結果がメディアやマスコミやネットによって公表され、多くの卒業生や受験生がこれを見ることで、大学の評価などに影響する時代になってしまったことです。文科省はこれを上手く利用し、大学が文科省の施策にノーと言えない、文科省の施策に乗っていかざるを得ない、大学の自主性などどこに行ってしまったか、というような環境を作り出してしまいました。この現状は本学でも同じで、現実的には無理だと思ふような競争プロジェクトに応募せざるを得ないようにさせられ、「通ったら通ったで地獄、落ちたら落ちたで地獄」という状況に陥らされています。こうした文科省から矢継ぎ早に出される施策をすべて無視するべきである等と言う気は全くありません。そんなことが許されるような、生易しい環境ではなくなったと思います。しかし、結果として同志社はどういう大学になっていくのでしょうか。最近の教職員、学生の同志社へのアイデンティティの低さ、同志社離れ、さらには同志社の関係者が起こす世間を騒がす事件の数々。こんな学園を作るつもりはなかったと新島は草葉の陰でほぞを噛んでいるのではないかと思います。こうした出来事は、同志社が「世より取らんとす」大学になりつつあるためではないかと思えてなりません。同志社が何を考えて作られた学校なのかをもう一度、しっかり見直してみる必要があるのではないのでしょうか。もう一度「世に与えんと欲す」大学、「一人一人の大切さ」を覚える大学の在り方を見直してみる必要があるのではないのでしょうか。幸い村田学長は、いろいろな場でお話を聞く限り、宗教教育の重要性を真剣にお考えの方だと思います。

私は、昔の時代に戻すべきだと言っているものではありません。そんなものを望む気は毛頭ありません。建学の精神をもう一度心に留めることと、大学改革に取り組むことが、矛盾するものではないと思います。むしろそれを言葉づらだけでなく、真に取り入れた実行を伴う大学改革こそ、今求められている大学改革なのではないかと思えます。同志社小学校は、何か問題にぶつかると、新島ならどのようにしただろうか、先人たちはどう考えただろうかと、建学の精神にたちかえって作られました。大谷総長が、新入社員を前に、L S（ロー・スクール）の話をされたのを思い出します。大谷総長は、「同志社のL Sは、卒業させ、司法試験に通すことだけでは駄目だ。同志社のL Sを卒業した弁護士、裁判官たちは、自分の受けもった被疑者の立場に立ち、その苦しみや悲しみ等の感情を覚え、それをベースに考えることができるような人物として卒業させなければならない」と。この総長の言葉に新島の精神が生きているように思えます。

世に与える学園を維持するために

私は今年から私の講義科目の成績に、このチャペル・アワーへの出席を加味し、総合的に判断することにいたしました。また、配布資料の欄外に新島の言葉、聖句などを書くことにいたしました。私がこの同志社で教鞭をとる限り、続けるつもりでいます。チャペル・アワーは、学生の皆さんにとって、将来の生き方を考える上で、現在の自分を見つめる上で、参考になるような、得難い話を簡単に聞くことができる、いわば同志社の財産だと思っております。

この場を借りて元キリスト教文化センターの所長として、大学執行部に提言をしたいと思えます。

一つ、チャペル・アワーの時間帯に昔のように講義を入れさせないようにし、学生が自らの意思でチャペル・アワーに足を運ぶことができる環境を、構築していただきたい。時間がないという意見があるかと思いますが、昼食の時間も講義をするようにしたらどうでしょうか。学生が集まる時間がないという意見もあるでしょうが、チャペル・アワーの時間をそれに充てる学生もいるでしょう。

二つ、せめて教職員が1年に1回あるいは2回はチャペル・アワーに足を運ぶように義務付けていただきたい。

三つ、各学部が同志社科目を必修にすること。学内校出身者もいます。グレード制を考える必要があるのではないのでしょうか。

四つ、キリスト教文化センターと同志社社史資料センターを統一し、同志社センター（仮称）とし、建学の精神にかかわる教育を強力に推し進める組織を作り、ゆくゆくは学内諸学校の宗教部を統合し、同志社センター（仮称）が学校法人同志社の直轄組織として、これを統括し、各諸学校の宗教教育を統一的に行うようにする。

以上を同志社200年のために、同志社が「世に与えんと欲す」大学を維持するために、そして何よりも羅針盤を失い、大海原を迷走することがないようにするために、ぜひ、できることから実行していただければと思います。

2015年5月6日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録